The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小津桂窓書簡一通
Author(s)	福山, 武徳
Citation	語文. 2002, 79, p. 35-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69012
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

小津桂窓書簡一通

福山武徳

鹿児島県肝属郡内之浦町の岩永静夫氏が、小津桂窓の書簡一通を所蔵しておられたが、一昨年冬、焼失した。本書簡は巻紙約一米九十糎に書かれたものでほかに、幕閣の要人宛書簡六通と建武三年楠庄五郎宛同兵衛の書簡を所蔵されており、これら書簡と共に入手されたものと想像するが、その入手の経緯は不明である。以前、私がフィルムに収めたことがあり、その写真によって紹介する。ただ、写真撮影する際の私の不手際で、書簡末尾の宛名の部分が写っていない。

天理図書館西荘文庫の木村黙老書簡（「天理図書館善本叢書」和書之部五十三巻、「馬琴書翰集」に所収。以下、引用書簡は同書による。）の中に、嘉永元年三月廿三日付の桂窓書簡に対する返信（同年五月廿一日付）があり、その記事と本書簡に記された「聞まゝの記」写本に関する件、伊勢の著名人の墨跡に関する件等の記事が符号することから、本書簡は、嘉永元年三月廿三日付の木村黙老宛書簡であると判断される。

小津桂窓、名は久足、後与右衛門、新蔵、伊勢松坂百足町に住す。江戸店持ちの富商で江戸の深川油堀通富久町に江戸店があった。殿村篠斎の紹介で文政十一年以降滝沢馬琴と親交があった。安政五年没。五十五歳。

木村黙老、名は与総右衛門、のち亘。讃岐高松藩松平氏に仕え、江戸家老、国家老の職にあった。桂窓と交際を始めたのは高松へ帰国後、天保十一年からで、滝沢馬琴の紹介による。「聞まゝの記」「国字小説通」などの著書がある。安政三年没。八十三歳。

木村黙老、小津桂窓、殿村篠斎は、馬琴作品の批評家グループのメンバーとして知られる。

以下、写真を掲出し、翻刻を示す。翻刻にあたって、旧字体は新字体に改め、私に句読点を付した。

年頭之尊書被下難有
拝見仕候。御吉慶御同前ニ
芽出度申納候。先以御揃
益御機嫌能被遊御超歳
候由、恐悦至極奉存候。随而
当方無異加寿仕候。乍憚
御休意思召可被下候。

一是ゟ年始状差上可申処、
私儀早春業用ニ而江戸表江

参り、漸此程帰宅仕候。
出立前取紛無其儀
貴書も留主中へ届キ帰宅
後拝見、御答も延引
両様之失敬御高免可被下候。
今便不取敢御答申上候。

一旧冬差上候筆工料并ニ
万金丹[1]御入手被下候由、外ニ
続聞まゝ之記写、願主より
差上候万金丹、御落手
御厚礼被仰下、其趣申
伝候。

一立后次第并展観録御入手
被下候由、得尊意奉存候。

一申集坤之内、和歌歌話
一条御うつさせ難有入手仕候、
右ニ而前編全備ニ相成、
永珍蔵可仕大慶不過之
御礼難申尽候。

一竹林上人墨痕[2]頼候処、
御恵投被下如何斗か難有
奉存候。老荘等見苦敷ト
御念書被仰下候へ共、左様ニも
存不申。是等ハ金銀ニ而手ニ
入かたき品、如何斗か難有
御厚礼難申尽、永秘蔵
可仕候。

一柏野屋左休書[3]ハ御頼
置被下御手ニ入レ候由、後便
可被仰付候由、難有奉存候。
所謂得隴望蜀之類ニ
候へ共、何分よろしく奉願候。

一藤井孝蔵書[4]ハ、御尋
被下候へ共無之由、御尤ニ承
知仕候。色々御配慮被懸
奉縮入候。

一御即位次第[5]十七段
前文之事被仰下、次第ハ
早速ニうつさせさし上候。前文ハ
愚息ニうつさせさし上候。右之
前文ハ一二ハ元来付キ居候
をうつし候。傍仮字ハ
元来ハ無之候へ共、甚奇ナル

よみくせなるものニ候故、去秋
上京之節、是迄も出候事
御座候堂上方ニ而直伝ニ
承り、かなつけ置申候。

一続聞まゝの記御うつし
出来候分、此度一冊御遣シ
被下慥ニ入手仕候。右之代
金弐朱
今便差上申候。右ニ而上物
少々不足仕候へ共、右並便
御勘定可仕候。

一為念申上候。続聞まゝ之記
是迄揃候分
子丑寅卯
右、元亨利貞相揃
其外
辰元亨二冊
巳貞
午元
右之通ニ御座候。依而、已後
辰利貞
巳元亨利
午亨利貞

右之順ニ次々御うつさせ越
被下度段、願主より申出候。

一尊君様ニも一癖ある人之
書画御好被遊、奇物御所
蔵之よし、小生も色々奇物
相好、畸人伝ニ出候人之手跡
など、色々相集メ候。夫ニ付、
竹林上人之書御恵投被下候
御報ニ、勢地之人々之書何か
さし上度候へ共、思召計かね候。
先ハ
本居宣長(6)
韓天寿
月僊(7)
奥田三角(8)
伝ハ畸人伝ニ出
瑣啓(9)
伝ハ続扶桑隠逸伝
巻下ニ出
是等之内、若御望之品も
候ハゞ差上申度候。無御隔意
可被仰下候。

一在江戸中珍敷事も無之

著作堂へも両度相尋候。翁も
少々老衰之気味ナキニハ
無之候へ共、未気力慥ニ而
当時気遣イ無之様ニ
相見江歓申候。五色石
新板之作意なと尤感心
仕候。宝生太夫勧進能
殊之外絶入申候。初日
二日一見、面白事ニ覚候。帰路
箱根山大雪、三月六日之
事ニ而、満開之桜ニ積雪
之風景始而一見、珍敷覚
申候。何か申上候事も有之様覚
候へ共、未帰宅後日数も無之
心あわたゝしく、申落候余も
可有之候。後便寛々
可申上候。恐惶謹言

(三カ)
弐月廿三日　　桂窓拝

馬琴が所蔵していた木村黙老の著「聞まゝの記」写本十四冊を桂窓が譲り受けたのは天保十年のことであった（天保十・九・二四桂窓宛馬琴書簡）。黙老は既に天保九年には「聞まゝの記」（十二支各集に乾坤二巻）の記述を終え、同年冬からは続編「続聞まゝの記」（十二支各集に元亨利貞四巻）の記述にかかっていた（天保九・十二・十六篠斎宛黙老書簡）。

桂窓は入手した馬琴本「聞まゝの記」の欠本を補充すべく、殿村篠斎を介して黙老に写本作成の依頼をし、快諾を得（天保十一・六・九篠斎宛黙老書簡）、以後、黙老は松坂の両友へ同書の写本を作成して筆工料、紙代と引き換えに届けていた。その経緯については木村三四五氏の詳細な論考がある。[10]

本書簡に記されている「聞まゝの記」未揃分については、○印を付した辰利、巳利、午亨利、四冊は同年八月一日付でそれぞれ届けられている。また、黙老から贈られた竹林上人の書に対する返礼として示した伊勢の著名人の書について、黙老は月僊と奥田三角の書を所望し、早速届けられた。

月僊、三角之書御恵投被下、千万辱仕合奉存候。如貴命、月僊画者至而賤物多候故、是迄折々者見当候品茂有之候而も致疑惑候而相求不申候処、御蔭ニ而出所正敷真筆手ニ入、大慶仕候。将亦、三角書茂文面宜敷故、是亦大ニ相歓候事ニ御座候。（嘉永元年八・十七）

江戸滞在中、桂窓は二月六日から興行された宝生太夫の勧進能を初日、二日と見物しているから、二月初めにはすでに出府していた。この勧進能は宝生太夫友于が弘化二年に願い出て認可され、翌年興行の予定が江戸の大火のために延期され、嘉永元年に興行されたもので、「武江年表」嘉永元年の条に、

二月六日より晴天十五日の間筋違橋御門外加賀原に於いて、宝生太夫勧進能興行あり。五月十三日に終わる。興行の日毎に遠近の貴賤輻輳して錐を立つるの所なし。

と記すほどの盛況であった。

また、帰路、三月六日に箱根を越えているから、桂窓の江戸滞在は、少なくとも二月初めから三月初めまで、ほぼ一ヶ月ほどであったと思われる。その間、二回馬琴を訪れている。「馬琴日記」七月六日の条に、

松坂小津与右衛門書状、六月廿四日出壱封、深川かけみせゟ清右衛門方へ指出し候由ニて今日清右衛門持参、三月以来時候見舞状也。

とあり、同廿九日、馬琴はお路代筆で桂窓宛返信「中の長文状壱通」を認めた。

寔ニ当春は御出府之折柄、御来訪被成下、久々ニて拝顔、怡悦不少奉存候。併、毎度御帰りを被成御急候故、御もてなしも致かね、遺憾之至りニ奉存候、三月中御帰郷之後、拙翰ヲ以、御道中之御安否伺可申処、御存之小子持病之上、西ノ丸下戸田殿内、二月廿二日之火難ニて、婿女孫ども類焼、実ニ丸焼ニ成候間、見捨難三月迄、空しく送り候。

桂窓の馬琴訪問は二月廿二日の戸田殿内の火難以前のことであったろうか。

この年正月、馬琴は合巻「女郎花五色石台」二集八巻を甘泉堂から、読本「新局玉石台童子訓」六帙五巻を文渓堂から出版している。馬琴訪問の際には、これらの作品も話題になり、その作意について馬琴から聞くこともあったであろう。老いたりとはいえ、なお創作意欲の衰えぬ馬琴が、桂窓には「未気力慥ニ而当時気遣イ無之様」にみえたのであろうが、馬琴の健康はすぐれなかった。この年の「馬琴日記」には、腹痛、胸痛、喘息など体調不良を記す記事が散見される。十一月六日、馬琴は八十二歳で世を去った。

注

(1) 江戸時代、伊勢神宮参りのみやげとして知られた胃腸薬。黙老は高松へ帰国後、殿村篠斎に、伊勢朝熊の万金丹購入を依頼していたが、弘化三年篠斎は病に臥し、翌年死去。この頃から桂窓に購入依頼していたものと思われる。

(2) 清の康熙三年（一六六四）中国福建省の生まれ。法諱寂伝、道号道本。享保四年長崎に渡来。崇福寺六世となった。渡来前からすでに詩名が高く、広く文人墨客と文遊した。

(3) 未詳。

(4) 未詳。

(5) 「御即位次第」は、三条実継の写本一巻と享保二十年、桜町天皇の即位次第を詳記したものの二本がある（「増訂国書解題」）が、いずれであるかは、いま特定できない。

(6) 書家。名は天寿、字は大年、酔晋斎と号す。通称中川長四郎。伊勢松坂に住す。寛政七年没。四十九歳。

(7) 画僧。伊勢山田寂照寺に住す。名は元端、字は禅耆、号月儁、文化六年没、八十九歳。

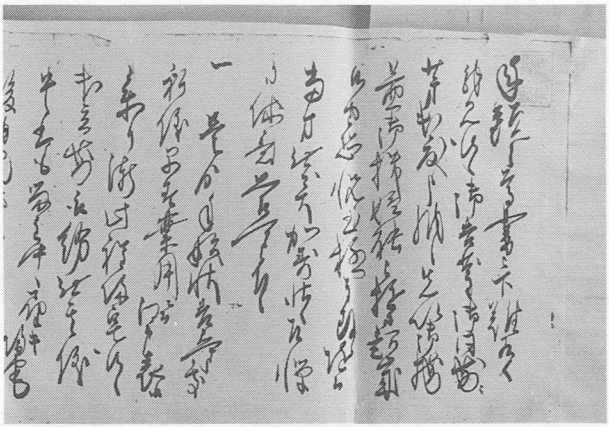
(8) 奥田氏、名は士亨、字は喜甫、号蘭江、通称惣四郎。伊藤東涯に学び二十九歳で藤堂侯の文学となる。天明三年没。八十歳。

(9) 伊勢の仏眼院に住し雲衆を教育す。後、相可に隠棲し四十余年山を下らず。元禄八年没。（続扶桑隠逸伝）

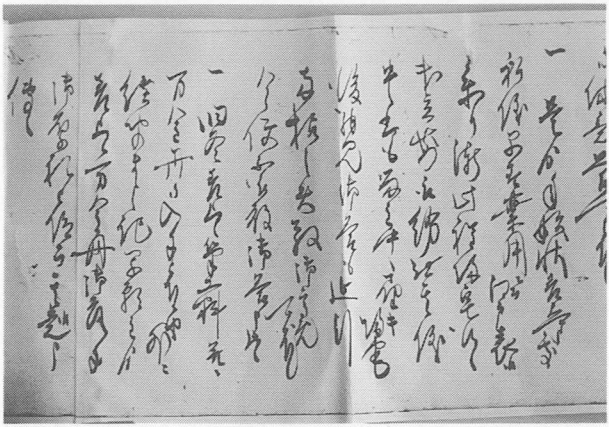
(10) 「聞まゝの記」。元禄鶴法度のことなど」、「木村三四五著作集Ⅰ」（八木書店）所収。

〔付記〕 書簡の翻刻にあたっては、鹿児島近世文学研究会の方々のご協力をいただいた。また、中山右尚鹿児島大学教授からは参考資料を拝借し、京都大学国文学研究室には、図書の閲覧に便宜をはかっていただいた。記して、感謝申し上げる。尚、調査の行き届かない部分も残したままである。御教示いただければ幸甚である。

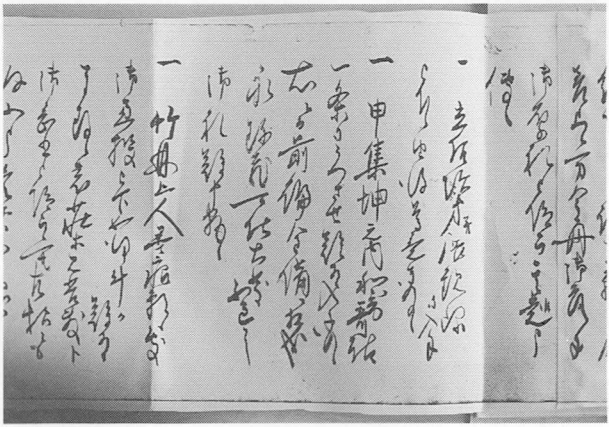
――鹿児島県立武岡台高校教諭――



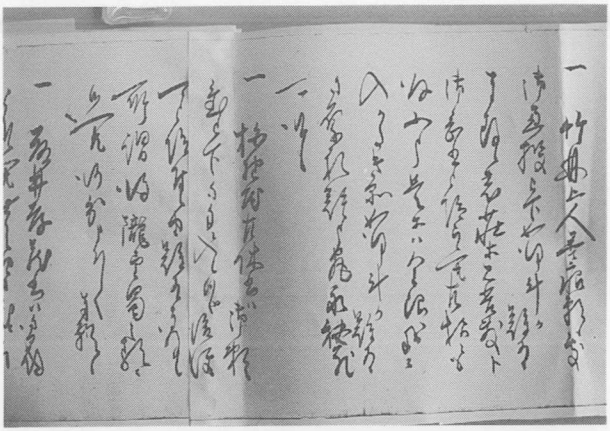
1



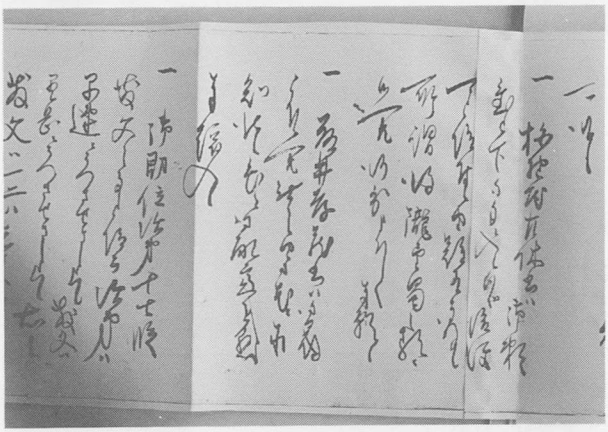
2



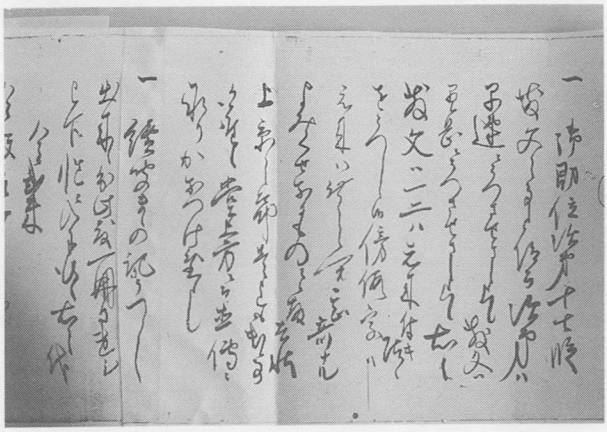
3



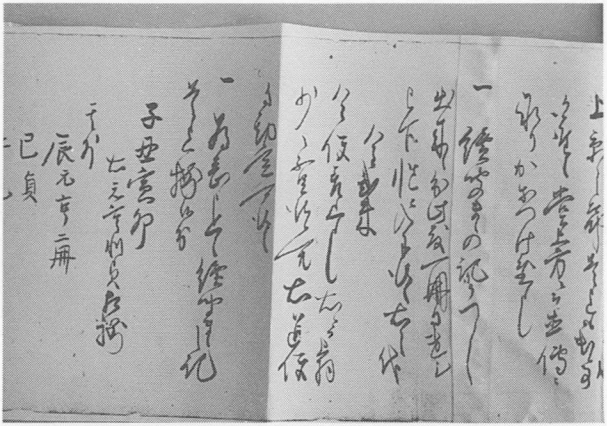
4



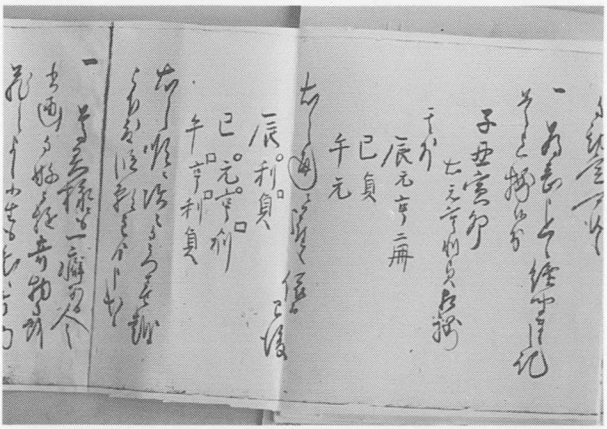
5



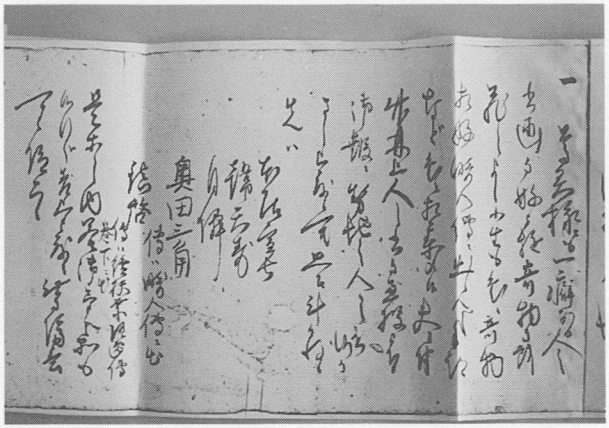
6



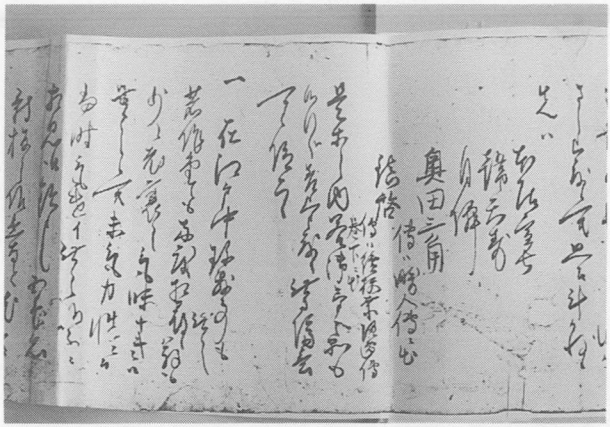
7



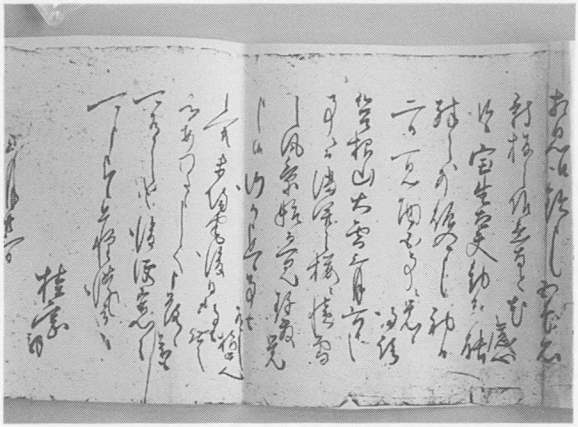
8



9



10



11